



(3) 新潟港防波堤上にて川上新潟縣土木部長の説明を聞く一行。

(4) 新潟港視察中の一行乗船中の一部で中央は眞田前會長。



## 新潟港へ

### 土木學會夏の見學 (2)

信濃川沿岸の午後の日盛りは中々暑く、川口驛で再び新潟行に連絡して午後四時新潟驛に下車し、直に自働車にて臨港の縣營埠頭に向つた。途中有名な萬代橋をドライブする。

萬代橋は古來新潟の一名物であるが、先年信濃川の改修工事と相俟つて近代的な鐵筋コンクリート拱橋に改築されたのである。記者も今眼前に東京市内にも見られぬ此の堂々たる混泥土橋の姿を見て感慨深いものがあつた。恰も東京の一行中に本橋の設計者田中博士あり、初めて此の橋上をドライブする博士の感慨も又無量であらう。此工事の爲に努力した潜函工事のエキスパート正子重三氏の一行中に居ないのも惜しい様な気がする。

縣埠頭に於て新潟縣より設けられた臨時觀覽船三艘に分乘して新潟港を視察する事となつた。新潟港は即ち信濃河口一帯であつて、大河津分水工事成後は港の價値を増大する事となつたが、尙ほ清水トンネル開通後、東京との距離を短縮し、尙ほ滿洲國成立後は北朝鮮の羅津港と呼應して今や一大發展の過程に向はんとするるのである。港内は數隻の浚渫船が作業しつゝあつたが、北側唯一の防波堤は日本海の荒波をうけて混泥土ブロックの倒壞甚しい状態であつた。案内役の新潟縣土木部長川上氏は港の技術的施設に就いて種々説明の傍ら問題を提出して

會員の意見を求められた。

再び臨港鐵道の埠頭の上陸して、國立農業倉庫の前を通り新潟農園を參觀した。東洋一の草花園ではあるが有名なるチューリップは既に花期を過ぎて、芍薬の花が眞盛りであつた農園 技師長小山氏から創立以來の種々なる經驗談などを聞いて、所謂國産球根が將に世界を壓倒せんとするの意氣に一同感嘆した

農園の松原と清々しい砂地を踏んだ思出は今日の最も印象的なものであつた。それより再び萬代橋をドライブして市内に入り、物産陳列場に於て情緒人形などを求め、隣れる縣廳舎の建物を驅足で視察した。縣廳舎は最近新築されたもので中央ホールの大大理石柱など堂々たるもので、今は亡き岡田信一郎氏設計の銅刻の文字と特に目についた。

縣廳玄関より自働車にて新潟第一等の料亭鍋茶屋に着いた時は日は全く没して市内は電燈の光りに輝いてゐた。

新潟市の鍋茶屋は建築の美と家具調度の設備と料理の美なるに於て古來新潟の名物とされてゐる。之に加ふるに新潟の情緒溢るゝあり將に遠來の都人もも慰むるに遺憾なきものがある。鍋茶屋に於ける歡迎晚餐會は新潟振興會長としての新潟縣知事の主催になるもので開宴に先ち千葉知事は和服姿の短身を末席に立つて土木學會視察團歓迎の辭を述べ、併せて新潟港の現在及將來の使命に就て希望に輝ける發展を強調し、之に對し帝大教授草間偉博士は土木學會を代表して町重なる謝辭を述べ、眞田博士の發聲にて一同互に新潟港及土木學會の萬歳を三唱して和氣霽々裡に宴に移つた。

宴中新潟藝者の民謡踊りは藝術味豊かな優雅なものであつた、近來何處の町へ移つても郷土的民謡踊りがあつて、何れも俗惡な感に溢れてゐるで今夕はからずも純日本的民謡踊りに接したわけである  
鍋茶屋の宴に名残りを惜しみつゝ一行中五十名は直夜歸京の途に就いた。

尙ほ佐波島視察に残つた會員二十名程と、眞田博士の一行は明日大河津分水工事を視察するとの事であつた。記者も大河津分水堰は是非視察したい處であるが、他日に割愛して新潟驛より車中に入つた。

(一記者)